

一人ひとりの想いつたえたい >>> あなたの声でつくる情報誌

NO.58

2005・春号

まなこ

企画・発行

武蔵野市企画政策室市民活動センター男女共同参画担当



特集 生きる 命の輝き、つたえられたら

取材

- 温かいから、ニオイがあるから、命がある
日本獣医畜産大学 左向敏紀先生 岩瀬健二さん 持田比佐子さん
- 息子との別れが教えてくれたこと 赤柴文子さん
- 東京多摩いのちの電話 大川宏幸さん

寄稿

- ・ お節介やきれいごとも大事よね まなこレポーター 福井貴美子

情報

- ・ 平成17年度男女共同参画推進団体の登録・更新 市民活動センター男女共同参画担当
- ・ 『まなこ』レポーター募集

繰り返し起こる記録的な大災害。続発する悪質な犯罪。
誰もが尊い命の失われることを悲しんでいるはずなのに、一人ひとりの命の重みや大切さが、日増しに希薄になっているように感じられるのはなぜでしょうか。
この時代、命の輝きや生きることの喜びをつたえていくには、どんなことが大切なのでしょう。

今を生きている私たちにできることは、互いの手と手をつなぎ合い、相手の気持ちに寄り添って考えること。たとえきれいごとと言われようとも、一人ひとりの想いが紡がれ、つながれていけば、そこから新たな希望の光が射してくるのではないのでしょうか。
決して一人ではない。ともに生きることから、「再生」への道は、始まっていくのです。



温かいから、ニオイがあるから、命がある

家族同然にベッドと暮したり、動物に安らぎや癒しを求める人が増えた。一方、生身の動物の温かさや鳴き声に、驚いたりこわがったりする現代の子たち。命の意味を見つめなおすには、牛や羊など畜産動物と子どもたちとのふれあい体験も、ひとつの方法かもしれない。

アニマルファーム体験クラブは、小中学生対象の土曜学校という武蔵野市の講座。市内境南町にある日本獣医畜産大学の教員や学生の指導のもと、富士山麓の大学研修施設に子どもたちが宿泊し、付属牧場で動物の世話を体験実習する。

同大学を訪ねて獣医学部獣医学科獣医内科学専門の左向敏紀先生、獣医学科5年の岩瀬健二さん、4年の持田比佐子さんにお話を聞いた。
(注・学年は、05年1月現在)



大学中庭、学内の犬たち、仲間たちと。後列中央が、左向敏紀先生
後列左から2人目が、岩瀬健二さん。後列右端が、持田比佐子さん

アニマルファーム体験クラブでは「動物のことがくわしくわかって楽しい」「命の大切さがとてもよくわかった」と反響が大きいそうです。

持田 牛・馬など大型動物のスケールへの驚きと日常できない世話、一泊とはいえ親元を離れることもあり子どもたちはとにかく興奮していますね。ストレートな反応が新鮮です。
岩瀬 手伝いの学生たちは子どもに接するボランティア活動として、大変さもあるけど楽しんでます。自分も学生の中では一番多く参加して

られた動物のための施設に通う学生もいました。九州普賢岳の噴火災害では、ヤケドした牛たちを引き取れないか打診されましたが、移動するには遠すぎるので、近県に連れて行かれました。



「牛のお乳ってあったかいね」
アニマルファーム体験クラブにて

震災時の動物救済には獣医師会、現地の公務員の団体、動物愛護協会などが中心になって活動します。開業獣医師が多く参加するNPO法人「野生動物救護獣医師協会」もあります。卒業生も多数かかわっていて、傷ついた海鳥を介抱する訓練にも、意志のある学生が機会に応じて参加しています。

獣医師という立場から、死のシヨツクを乗り越えて生きるためのヒントが何かあれば、教えてほしい。

左向 飼い主同様に死を悼むと同時に、動物と人の未来のために役立つ

います。また、獣医師は動物の体調や病気回復にあたって、言葉できちんと動物の状態を伝えることが必要です。子どもたちに様々な説明をするアニマルファーム体験は学生たちにはいい訓練にもなるわけです。

左向 TVやCGで疑似体験全盛の時代、ニオイも含めた現実体験をと、牛の世話や乳しぼり、乗馬、羊の毛刈り、犬の散歩、フェルト工作、ソーセージ作りと試食等、いろいろなことをします。参加する子どもの定員は30人ほどですが、大学からもスタッフとして同じくらいの人数が同行しています。

岩瀬 大きさやかたちがヒトと違って、動物は決してこわいものじゃない、と感じ取ってほしい。牛舎独特のニオイに、「くさいい！」とみんな口々に言います。実際に牛の乳をしぼったりする体験や世話をして、ヒトが食べるものは工場じゃなくて、そんなに大きい所から生み出されている、という事実もわかってほしい。

何かを発見しようとする研究者・技術者としての視点も、私たちには必要です。だから死を客観的に受け止める努力はしておかなくては。
現在、内科学教室ではサプリメントなど健康食品の効果や影響を調べた実験が多く行われていて、命を奪うような実験は、まずありません。やむをえない場合でも生きていた動物を危険にさらさないよう、標本や模型、もう死んだ個体で実習する例が多いですね。死に直面する機会が確かに減っていますから、獣医師になったときにシヨツクを感じてしまいうかなという心配もあります。

岩瀬 最終的には食肉になるための牛、牛乳をしぼるための牛を診ていくことになると思うんです。矛盾はあるかもしれませんが、死にマヒして鈍感な人間にはなりたくない。死んでしまつて悲しい、だけでなく、命が落ちたときは黙祷し命を尊ぶ気持ちを持てたい、と思つています。

持田・岩瀬 亡くなった動物たちの魂を祀るための鎮魂碑も校内にはあります。

※秋には慰霊祭が行われ、命の意味を問い直す機会にもなっている。

(取材 藤井美里)

獣医師をめざしているのはなぜ?

岩瀬 父が産業動物(畜産農家が飼育する動物)の獣医師なので、牛や馬の出産に立ち会うのは珍しくないという環境に育ちました。父は動物に興味津々の私をおぶって往診に連れて行き、私は私で牛の足の間をハイハイでぐり抜けて遊んでいたそうです。今思えば危険ですけどね。犬猫より身近な動物が牛でした。

そして子どもの頃から食べることが大好きだったからかな、人が生きる上で欠かせない「食」を育て上げるってかっこいいなあ、と。将来はやはり畜産関係の職業に就きたいと思つています。くさいし汚れる仕事で、父は「獣医になれ」と言つたことは一度もありません。でも幼稚園の頃からの夢だったから、いわば粘り勝ち、です。



アニマルファーム体験クラブにて

えへへへ。

左向 10年前の阪神・淡路大震災では現地の迷い犬猫たちの避難所に学生たちがボランティアに向かい、世話や健康チェックを行いました。学年末にかかる忙しい時期でしたが「日頃の知識や技術が役立つのは今」と大学も全面的に協力していました。三宅島噴火避難の際は、日野市に作

過去6年間、毎年3万数千の方々が自殺で亡くなっている（2004年警察庁「自殺の概要資料」より）。厚生労働省では自殺防止のための対策事業に取り組んでいる。自殺予防への啓発活動を進めるとともに「いのちの電話」などの相談体制の強化をし、更に補助事業として2001年より12月に7日間「自殺予防いのちの電話」のフリーダイヤルを設置。「東京多摩いのちの電話」も参加している。

実際に生きる希望を失って電話をかけてくる人たちに、どんな手助けをしているのか「東京多摩いのちの電話」の事務局長、大川宏幸さんに話を伺った。
(取材・構成 尾花雅子)



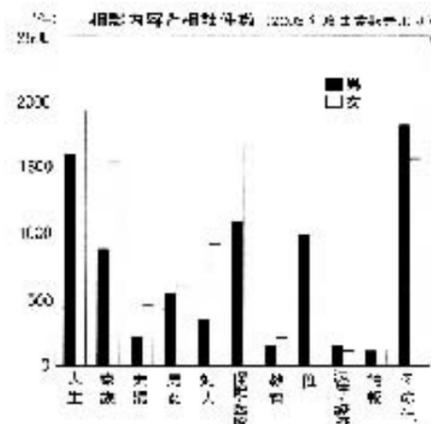
「相手の声に耳を傾け、ともに感じるこの積み重ねがこの電話相談が成り立ち続いています」と大川さん

「いのちの電話」は約50年前にイギリスで起こり急速に世界各国に発展、日本では71年に発足した。その後全国に広がり「東京多摩いのちの電話」は85年に設立された。変化の激しい現代社会。困ったり、不安になったとき、誰にも相談できず悩んでいる人がたくさんいる。自殺を

考えていたり、人間関係や経済上の問題などで助けや励ましを求めている一人ひとりと、電話という手段で対話することにより、再び生きる勇気を見出していかれるように活動している。

電話をかける人も受ける人も名乗ることはない。弁護士が直接答える法律相談が月に2回あり、他に専門的なアドバイスを受けた人には紹介もする。電話を受ける相談員も弁護士も全員ボランティア。だが、相談員になるためには養成研修を受けなければならない。4月から2年間の訓練課程を受講し、所定の審査を経て認定を受ける。

多くの人に活動を知ってもらうために講演会を行っている。また、広報誌を発行したり、ホームページも開設している。



最近では、経済面での相談や離婚問題が増えてきている。一件あたりの相談時間は平均35分（女性44分・男性24分）



東京多摩いのちの電話

- ・秘密はかたく守ります。
- ・名前をいう必要はありません。
- ・お互いの宗教や思想を尊重します。
- ・電話相談員は規定の訓練を終了し、認定を受けた人々です。
- ・弁護士による法律相談もあります。

相談電話 042 (327) 4343
相談時間 午前10時～午後9時
毎日（年中無休） 3台の電話で受けています
URL <http://homepagel.nifty.com/ltama/>

取材体験記

話を聞いてもらえたら……

まなこレポーター 保坂敏子

「いのちの電話」事務局への取材ということで、私は少々戸惑いを覚えながらも出かけました。

世の中がどんなに複雑になっても、多くの悩みは今も昔もあまり変わらないということをお聞きしました。相談者のプライバシーもあるので、なかなか踏み込んだ話はしていただけなかったのですが、相談員の方も精神的に大変であると感じるとともに、一人でも多くの方が救われればと思いました。活動されている相談員の皆さんは、きちんとした研修を受けられ種々の審査に合格されているそうです。対応の基本は、相手の話をまずよく聞き、援助はするが指導はしないと言われました。

私にとっても日常生活において、互いに話を聞いたり聞いてもらったりする相手がいるだけで、どんなに心の支えになっているかを改めて思い、感謝の気持ちでいっぱいになりました。

「重いテーマの取材でしたが、大川さんのやさしい人柄に救われる思いがしました」



息子との別れが教えてくれたこと

ふみこ
赤柴文子さん 吉祥寺東町



「秋の秋の花が咲く頃に作るから、おはぎ。春は、牡丹の花でぼた餅よ」

お母さんごめんねと我に詫びし息子の告知直後の言葉忘れず
01年の秋、赤柴文子さんは、自作の短歌を織り込んだ1冊の本「死ぬことは、生きること―三人の肉親を看取って」を自費出版した。実直な教育者だった父良妻賢母の鏡のようだった母。母の死から6年後の91年、思いもかけなかった不幸に襲われる。幸せな家庭を築いていた38歳の長男、元康さんが、突然末期のすい臓ガンと診断されたのである。それからわずか3か月、元康さんは、まだ9歳と7歳の男の子を遺して亡くなった。最期の時まで家族を気遣い、決して自分の運命を嘆くことはなく。それでも、何も知らない幼い兄弟が寄り添ってくると、そつと顔をそむけることもあった。「真正面から死と向き合ってたって無駄にすることはできない。日だって無駄にすることはできない。」

孫たちばかりでなく、子どもたち皆の成長を見守ることが、遺された私たちの役目。そんな思いであの頃は必死だった」と。
やがて、その思いが、ひとすじの光をもたらすことになる。
しばらくして学校の

第2・4土曜日が休みになったのを機に、書道や水墨画にも長く親しんできた赤柴さんは、「かく」ことで子どもたちにつたえられることはないかと、自宅の居間を開放して、無償の「お手紙教室」を開くことを思い付いた。高校の教師をしていた古くからの友人が協力を申し出てくれた。まだ戦前からのご近所付き合いが残る東町安養寺裏の横路。すぐに昔馴染みの孫やひ孫たちが、連れ立ってやって来た。「女の子ばかりだけど、個性はさまざま。おとなしくて引込み思案の子も、手紙で思いをつたえられるようになると、だんだん自分の意見をはっきり言えるようになってくるの」節分、ひな祭り、お彼岸。かつては母から祖母から教えられてきたこと一つひとつが教材になった。
今でも毎週土曜日の午前中、時にはもち米をふかして小豆を煮たり、音楽好きの夫、健夫さんのピアノで合唱を楽しんだり。「日々の暮らしを大切にすることから、ほんとうのやさしさや思いやりの気持ちを学んでほしい。その上でどの子もやりたいことを見つけてくれたら……。私たちがぐずぐずしてたらあちらに行つたときに息子に合わせる顔がないでしょ」
孫たちも大きく成長した。グラウンドに立つ後ろ姿に、元康さんの姿がだぶって見える。
(文 森 治美)

取材体験記

ほんとうのやさしさと思いやり

まなこレポーター 馳 令子

五日市街道から一步入るとそこは不思議なほどの静けさでした。赤柴さんのお住まいのこの道沿いに住む方々は、今でも月1回会合を開いているそうです。吉祥寺という街で昔ながらの心の通ったご近所付き合いをされているというお話は、私をほのぼのとした気分させてくれました。

「お手紙教室」では、礼儀作法や日本の古くからの行事などを体験をまじえながら楽しく教えられているそうです。かつては生活の中に溶けこんでいた行事が今ではイベント化され、本来の意味もわからずお祭り騒ぎする傾向にあります。私も母から伝えられたことが娘に十分伝わっているのか不安になります。

我が子の死という悲しい経験をされた赤柴さん。母親としてこれ以上の悲しみはないと思います。その心の叫びを短

歌に詠まれました。歌を詠むことが心の支えになったとおっしゃっています。歌が赤柴さんの悲しみを少しずつエネルギーに変えていったように思います。また、失ったことで得たやさしさ、思いやりの気持ち。「お手紙教室」にはそんな下地があったのです。学校の先生でもなく自分のおばあちゃんでもない近所のおばあさんの教室は、習い事など時間に追われる子どもたちがゆったりとしたやさしい空気に包まれる心地良い場所なのでしょう。

教室の子どもたちの将来を見届けたい気持ちでいっぱいになった取材でした。



取材を終えてほっと談笑

平成17年度男女共同参画推進団体の登録・更新について

育児、介護、環境などの問題研究や、趣味を通して男女共同参画の推進を目指す活動をしている団体については、「男女共同参画推進団体」として登録しています。

登録の基準は、男女共同参画社会の実現に向けての活動を主たる目的として、継続的かつ計画的に活動する団体で、以下の5つです。

- ① 営利を目的とした団体でない
- ② 特定の政党、宗教又は教団を支援する活動でない
- ③ 団体の構成人員が5人以上で、原則として3分の2以上が武蔵野市内に在住
- ④ 団体の主な活動場所が武蔵野市内
- ⑤ 団体の組織及び活動のための規約を有する

登録団体は団体活動補助金の交付申請、むさしのヒューマン・ネットワークセンターの印刷機使用料の半額免除やロッカーの年間使用などができます。

現在登録中の団体で、17年度登録の継続または抹消を希望する場合、お手元の申請書を4月28日(木)までに提出してください。期日までに登録申請のあった団体は、団体名簿に登録し一般に公開します。

なお、新規登録は、随時受け付けています。

市民がつくる男女平等情報誌『まなこ』レポーター募集



家庭、地域、社会、労働の場などで男性・女性が共に抱えている問題について関心がある方、活動している方を募集します。

- 主な活動**
- ① 年4~5回のレポーター会議への出席(2歳以上就学前のお子さんの保育あり)
 - ② 各号のテーマに関する意見、提言、情報などのアンケートの提出
 - ③ 取材協力(編集委員の取材に同行し体験記の提出)記事の提供など。
 - ④ 原則としてボランティア(無償)です。

募集人員 市内在住・在勤・在学の方(男女は問いません)15名程度。超えた場合は調整します。

任期 1年間(平成17年4月から18年3月末)

記入例

①	『まなこ』レポーター希望
②	住所
③	氏名(ふりがな)
④	年齢
⑤	性別
⑥	電話番号
⑦	「わたしの興味ある『まなこ』へのテーマ」(100字程度)
⑧	あれば活動団体名

申し込み

- ・ はがき・FAXで(記入例をご参照ください)
- ・ 4月7日までに市民活動センター男女共同参画担当まで

安全で安心して暮らしていくために何が必要だと思いますか？ また日ごろから心がけていることは？

- ・ 先日、私が雪かきを始めたら同じマンションの人たちみんなが出てきて、マンション中の雪かきを一気に終えることができた。普段から挨拶したり、声をかけ合っているのが自然にできる行動だった。
- ・ 地域の人々が協力し、防犯に取り組むことが必要。安全な生活は誰かに頼って享受する「だけ」ではなく、考えて互いに手を取り合い自分たちでつくっていくものだと思う。
- ・ 家族の絆を大切にすること。人間は愛されているという思いがあれば、人の道から外れることはないのではないかと思う。
- ・ 人間の生命の尊さを学校や家庭で常に話し合うことが大切。感謝の気持ちを忘れず、「ありがとう」の言葉が常に口から出るよう心がけている。
- ・ 小学生の娘には、なるべく一人で歩かないことや、早めの帰宅などを言い聞かせている。どんなことが危険かを話し合ったりする。
- ・ 防犯ヘル持参。変な電話がきたら対応しない。
- ・ 子どもには挨拶励行を言っている反面、子どもを巻き込む犯罪の多発もあり、それはそれで不安だ。
- ・ 少しの変化を見逃さず元に戻すこと、ルールを破ることを皆が認めないことが大切(「割れ窓理論」の考え方)そのためには自らが、まず行動することだ。
- ・ 携帯に悪質なメールが入ったとき、武蔵野警察署生活安全課でとても親切に相談に乗ってもらった。警察は近づきにくい所と思っていたが、身近に感じた。

寄稿

お節介やきれいごととも大事よね

まなこレポーター 福井貴美子



子どもをまきこむ連日の事件報道にたまらず「いざとなったら嘸みついても蹴つてもいいから逃げなさい」と子どもに告げると「そんなことしていいの？」とつぶらな瞳がまつすぐ突き刺さった。日頃暴力とは無縁だから無理もない。できればこの最終兵器は使わない方が望ましい。でも親は24時間守ってやれない。警察のパトロールにも限界がある。防犯ブザーだけで十分かしら？最後は子ども自身が危機感を持つしかないのだろうか。

それを求めるにはあまりに心もとない娘に「今日も「おかえりなさい」と近所の方々が笑顔で声をかけてくれた。その声に、娘と幼い頃の私が重なる。「もう遅いから帰りなさい」「川の近くは危ないよ」場所と時代は違っても、大人たちは必ず親のまなざしで声をかけ、目を配ってくれていた。今も活きるこの地域力にわが子は見守っていただいている。ありがたい。最強の防衛力だ。

この昔ながらの地域力を今、次世代に伝えるべく、私も子どもたちを母のまなざしで見守っていきたい。「石を投げてはいけません」「塀に登ったら危ないよ」わが子もよその子も隔てなく同じ目線でそう声をあげることが、加害者も被害者も出さない秘訣なのかもしれない。それが今できうる大人の使命だとさえ思える。

今年に入ってテレビの定番組からも「悪いことしたら謝れ」「筋を通せ」「自分のことより人のためになれ」と、クサイ、ウザイと嫌われてきたキレイゴトが聞こえてきた。その通り！と、スッキリしているのは私だけだろうか？ドラマが高視聴率ときいて救われる思いだ。悪事を悪事といえる人間がいる。同じ価値観で助け合える仲間がいる。

近所の方々とともに、昔ながらの地域力を肌で覚えている私たち世代が子どもたちを見守っていけば、まだ間に合うのではないだろうか。そう思うと私のお節介も背中を押された気がして、ますます磨きがかかっていくのだった。

まなこ58号アンケートから

『まなこ』のアンケートはレポーターを中心にお願いしています(レポーターは毎年3月に募集。7ページ参照)

Q 災害被害に苦しむ人たちのために、何か行動を起こしたことがありますか？ また、つたえたいメッセージは？

- ・ 募金に協力。衣料、文具の送付
- ・ 最近、友人とフリマに出店し、わずかだが売り上げを新潟に寄付。そのことに賛同してくれたお客さんもいた。
- ・ 一つの台風での水害の後、すぐ次の台風が来る前に土のうを作って、水路際に積み上げた。
- ・ 神戸の地震で、家屋がつぶれた赤ちゃんのいる家族、近親者のいないお年寄りの方々に、幸い難を逃れた自分の家でははらくの間、いっしょに過ごしてもらった。
- ・ 被災者は本当につらい思いをされていると思うが、災害を風化させず、私たちにたくさんのお話を聞かせてほしい。
- ・ 被災者が苦難を乗り越え、笑顔を取り戻しつつある状況をメディア等から知るたび、かえってこちらが勇気づけられる。
- ・ 生きていれば必ずや立ち直れる。
- ・ 被災者の心情を思うと、かける言葉は見つからない。
- ・ 障害者や外国人に対しての援助、手助けが重要

Q これまでに命の大切さを実感したことがありますか？

- ・ 大切な人を亡くしたとき、改めて生きるということ意識した。
- ・ 子どもの恩師が亡くなった。中2の子どもたちは自分たちで考え、最後のお別れに行った。命の大切さ尊さを悲しい体験で再認識できたのではと思う。
- ・ 夫が手術後、看護師さんの呼びかけに一瞬、目を開いたとき「あー、生きている。神様ありがとう」と心から思った。
- ・ 庭の冬景色の中で、ある日緑の若芽が出、どんどん伸び、次いで白に彩られた水仙の花が咲く様は、生命力のすごさを再認識させられる。
- ・ 娘の友だちが小2のとき白血病になり、薬物治療で一度は退院するも半年あまりで再発。同じ型を持つその子の肺から、骨髄移植を受けた。今ではごく普通の高校生。人間の身体が持つ生命力に神秘的なものをさを感じる。
- ・ 生まれたばかりの我が子を抱いたとき、命の重みを実感できた気がする。
- ・ おいしいものを食べたとき
- ・ 毎回の食事のとき。自然の恵みや人間の知恵を感じながら食べるようにしている。

レポーター会議から



1月18日(火) 10:00~12:00 市役所第605会議室にて

● 57号の感想

・「東京しごとセンター」について

ハローワークとの違いに興味がある。どんなアドバイスをしてくれるのだろうか。／こういうところがあることを知らなかった。夫が定年になったら連れて行きたい。／どういう人が来てどのくらいの人が就業したのかなど、もっと具体的なことが知りたかった。

・自分のやりたいことを見つけられるのは幸せ。

・どういう考え方をすれば行動に移せるのか興味がある。

・家庭も子育ても仕事も、とがんばって活躍している人たちの共通点を探してみたい。

● 58号のテーマ「生きる」に関連して

- ・防犯は大事だが「人を信用するな」と教えられた子がどんな風に育つのか不安。
- ・災害のための準備をしてもちゃんと大事なものを持ち出せるだろうか。
- ・いろいろな防犯グッズが出ているが、最後は自分で自分を守るしかない。
- ・悪い人=オオカミだと思っている子どもにこれからどうやって教えていけばいいのか…。
- ・困ったときにちょっと子どもを預け合える関係があると安心できる。
- ・男性は電車の中で痴漢に間違えられないように気を配っている。

・熱を出したときに友だちが子どもを預かってくれて食事まで作ってもらったことがありとても助かった。自分もそういうことをしてあげられるようになりたい。

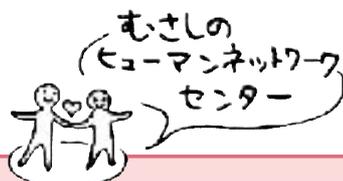
・子どもに「死」をどうやってつたえたらいいかわからない。

・実際に直面しないと「死」は実感できないのかもしれない。

・ペットが息を引き取る瞬間を見たとき子どもは大きなショックを受けたようだ。

・この時代、きれいごとや理想論があって初めて明るくなれるのでは。

・気持ちの上で座標軸が欲しいのでは。個性の時代と言われても出しているのかわからなくなっている。正しいことや理想的だと思うことをぶつけてほしい。



今回のテーマに関する本を、むさしのヒューマン・ネットワークセンターの蔵書の中から

● 65 -27歳の決意・92歳の情熱-



日野原重明・乙武洋匡 著 中央法規

「生き方上手」「生き方哲学」などの著書や、ミュージカルの脚色など、年齢を重ねるごとに活躍の場を広げている92歳の医師日野原重明氏と、大学在学中に『五体不満足』がベストセラーとなり、現在はスポーツライターとして活躍中である27歳の乙武洋匡氏の対談集である。65歳という年齢差のある二人だが、対談が始まるとその会話は水の流れるようによどむことなく進行していく。人生という豊かで長い道のりを「真実と信念」という宝石のような言葉で語る日野原氏と、生きるヒントを与えてほしいとのぞんだ乙武氏。まるで年若い友人同士との会話を楽しんでいるかのようである。

● 孤独な、なかよし-あいつぐ「事件」に思うこと-

青木 悦 著 坂本鉄平事務所



5年前いじめについて書いた本『アスファルトのたんぼぼ』の続編としてまとめられたもの。次々と報道される少年事件について、教育を視点に、全国を講演して歩いた資料をもとに「事件年表」を作成していく中で、著者は共通の問題点を指摘している。それは、①親子関係の崩壊②人間関係が作れない③異質な暴力の出現④選別され続けた管理教育。

これらが子どもたちを追いつめたと捉えている著者の視点に、私たちは目を向ける必要があるのではないだろうか。

武蔵野市境2-10-27 武蔵野市政センター2階 TEL・FAX 0422 (37) 3410
E-mail mhnc@tokyo.email.ne.jp URL http://www.clipcraft.or.jp/m_hnc

STAFF

レポーター	岩崎多恵子・曾我部一美 藤間みゆき・馳 令子 福井貴美子・保坂敏子 松田理恵
取材・編集	森 治美(編集長) 尾花雅子・加藤和子 藤井美里・星 詩子
☆他にもたくさんアンケート協力員、 編集協力員に支えていただいています。	
デザイン	小井戸厚子
イラスト	本田 倫
印刷	社会福祉法人 東京コロニー

★この時代、暖かくやさしい言葉こそ、心に届くことを実感した一年間でした。たくさん励ましの言葉、ありがとうございました。また、『まなこ』の誌面でお目にかかりましょう。
(森 治美)

★人生50年、いえいえこれから50年。まだまだ長い人生を元気に楽しく過ごすには今からだって遅くない！さあ、これから何を始めましょうか。
(星 詩子)

★友人の畑でとれた里芋、日が経って芽が出てきた。卓上で水栽培にしたらぐんぐん育ち、そして若葉が顔を出すと古い葉がしおれて世代交代。植物が命をつなぐ賢さや清々しさを目の当たりにした。
(藤井美里)

★「再生」をテーマにしたこの一年、自身を見つめなおすよい機会でもありました。反省点も多かったけれど頭の中はリフレッシュ。「まだまだこれから」と大いに励まされました。感謝。
(加藤和子)

★『まなこ』に関わり、人のために生きている人をたくさん知った。日本の未来も暗くはない。私も生き方を再考しなければ。豆電球一つ分の明かりでも灯せれば良いのだけれど。
(尾花雅子)

編集後記